

## 紹介

アメリカにおける中國古典詩の研究

——一九六二年から一九九六年まで—— 第一部(下)

ウィリアム・H・ニイハウザー・Jr

ウイスコンシン大

林順夫の『中國抒情詩の傳統の變容——姜夔と南宋の詞』『*The Transformation of The Chinese Lyrical Tradition, Chiang Kwei and the Southern Sung Tzu Poetry*』(Princeton: Princeton University Press, 1978)は、林の學位論文から生まれたもので、姜夔(一一五五頃—一二二二頃)の抒情詩の構造的な研究である。高友工の學生であったことから、林は學位論文をプリンストン大學出版局の詞の歴史の第二卷、南宋の卷として出版するように勧められたようだ。林の獨創的な研究は、劉若愚が北宋詞を扱った第一卷(上述)に對抗し、それとは違うものとなっている。ここでは姜夔以外にも南宋の抒情詩に對してほとんど言及がない

(辛棄疾と吳文英(一一二〇頃—一二六〇頃)の詞が一首ずつ、本の終わり近くで分析されているだけであり、エビローグのなかで宋末までの、詞というサブジャンルについて説明されている)。その代わりに、林は南宋文化の様々な相を調べ上げて、詞は十三世紀の初めに幻想、官能性、過度の彫琢によって狭められたという彼の主張を補強している(八頁)。この時代には、姜夔の主導のもとに、新しい詩的な意識が發達し、それが姜夔の得意とした詠物詞(對象物についての歌)に浸透している。この新しい意識は「物への退却」と主體(詩的な自己)から客體への轉換を伴った。この過程は三つの主な章において述べられている。「詩藝術における詩的な位置」、「感情の過程」、「物への退却」である。文學史的な構成は必ずしも説得力をもたないが、劉若愚と梅・高の影響が明らかで、姜夔の詞の緻密な読みは有効である。

林順夫の讀みの方法から戻って、梅・高の最後の論文について檢證しよう。「唐詩における意味、メタファー、引喩」(EJAS38 [1978]: pp. 281-324)のなかで、著者たちはその問題を更に進めた研究をいずれ發表すると記している

が、現在までのところ、これが連名で著わされた最後の論文である。ここでの主題は、「意味、ことに多様な意味が唐詩のなかで機能する方法」(二八二頁)である。この長い論文は四つの部分に分かれている。(1)「意味と等價の原理」(二八二頁—二九四頁)、(2)「隱喩と隱喩的關係」(二九四頁—三三四頁)、(3)「引喩と歴史的原型」(三三五頁—三三五頁)、(4)「隱喩的言語と分析的言語」(三三五頁—三五五頁)。著者たちはテキストの外へ出ていくことを好まないが(ニユークリティシズムと構造言語學に忠實であるために——三四七頁を参照)、「意味」と「引喩」を論じる場合には、そうもいつていられない。そこで、テキストを越えないと述べた厳格さを和らげるために彼らが呼び戻したのが、ニユークリティシズムが強調した「傳統」であった。

この論文のなかには「シンタククス」論文で用いられた觀念や用語を磨き上げようと努めた箇所があり、そのなかには有益で興味深いものがないではないが、しかし概してそれは本論の最も効果のない部分である。新しい術語を定義したり作り出したりすることは、前の論文と同じように、

おもしろい。「多意味素 polysemy」(二八三頁)、「隱喩的關係」(二九〇頁)、「意味のレベル」(二九〇頁)、「逸脱的文脈」(つまり矛盾する述語を伴った名詞。二九九頁)、「隱された隱喩・明らかな隱喩」(隱された隱喩においては比喩される語が中に含まれているが外には表現されていない。三〇三頁以下)、「歴史的引喩・部分的引喩・全體的引喩」(部分的引用はそれがあらわれる行だけを指し、全體的引用は詩全體を指す。三二八頁以下)——これは明らかにハイタワーが引喩のタイプを分類したもの(上述した「陶潜の詩における引喩」についての記述を参照)を精巧にしている——、「擴張された隱喩」(三四〇頁)、それらは梅・高の繼承者たちの批評用語に入った(或いは入るべきであった)術語である。そのなかには、梅・高とは違つた仕方で一般に理解されるようになった術語も二、三ある。たとえば「擴張された隱喩」は往々にしてアレゴリーの前提条件を指したり、或いは同義語を指すことすらある。彼らが提起した術語のなかで「否定的引喩」という語だけは、不正確なように見える。何かが起こらなかつたことを引用によって表すためには、「對

比的引喩」と呼んだ方がよいだろうと、私には思われる。ほかに「名詞カテゴリーの配列」といったような語や句は、ほとんど利用されていない。そのことばによって著者たちは、「岩、泉、光、林」の配列のような名詞のまとまり、配列が、「明らかに風景詩と結びつき」(二九五頁—二九六頁)、王維の詩のしるしですらある(二九五頁—二九六頁)と言っている。この觀念、そしてその傳統やトポスとの關係については、さらに研究を進める價值がある。

彼らが近體詩について公理として述べている内容も、記すに値する。(1) 近體詩はほとんどいつも、部分的と全體的の二つの意味のレベルで作用する(二九四頁)。(2) 近體詩における名詞の隱喩の大部分は、等價の原理によって組み立てられ、比喩される語と比喩する語とのつながりは兩者に共有される特質にかかっている(三二三頁)。(3) 對句はミニアチュアの抒情詩であり、一つの考え、ないし共通する根據を帯びている(三二三頁)。(4) 抒情詩を定義する二つの特徴は、(a)簡潔性と(b)主體的内容、である。「シンタククス」論文から、たとえば二八九頁の「江漢」

の詩のような例を見本に引きながら、著者たちは彼らの前の研究における觀念をこの論文に結びつけようとしている。李白の「玉階怨」を讀んだ際の「テクスチュアー」(三二八頁)のような觀念を適用して、その術語が有用且つ有効であることを示す。

さらに論じなければならぬ点が三つある。第一は、三〇六頁において、漢の將軍、李廣の引用を伴う詩を説明するなかで、著者たちはこう書いているところである。

メッセージを受け取るのに弱い信號で十分であるという事實は、情報の大部分は發信者と受信者の間で共有されていることを意味する。これは中國の詩、中國の文化についても重要なことを語っている。つまり、中國の詩は傳統を背負った文化の環境のなかで作用しているものであり、教育を受けた讀者は次のような事實は熟知していると想定されていることである。すなわち、李廣は岩を虎と見間違えて弓を射たこと。中唐以後、宦官がその力、影響をあまりに強く及ぼしたために、常に批判的になったこと。事實をこのように雜

多に集めたことは奇妙に思われるが、そこに含まれている原理についてはなにも不思議な點はない。多くの情報が共有されている場合には、メッセージを伝えるのにわずかなヒントだけで十分なのだから。

この箇所は、劉若愚の『中國詩の技法』のなかの「西歐の讀者は中國詩の大多數が、様々な時代に書かれたにもかかわらず、中國の讀者にとっては同時代性をもつということとを想起すべきだ」という主張を思い起こさせる。しかしそれは高・劉・梅よりあとの世代の、中國古典の訓練を受けていない中國人の讀者にとつても有効であろうか。私は疑いを抱いている。

第二に、梅・高は詩の注釋の發展を次のように分析している(三三三頁)。

もし近代の懷疑主義が詩の正しい理解にとつて障害であるならば、傳統的な術學的態度はもう一つの障害である。宋代以後、注釋の傳統は、詩の注を書くことは歴史の研究することになってしまい、そして最も重大なのは、注釋者の博識をひけらかす機會にしてし

まったことだ。

この主張は正しいかも知れないが、しかし半分だけ眞實である。宋代における注釋の勃興のなかでそれと同じくらい重要なことは、唐代の詩人の驚くべき數が與えた衝撃であった。唐代の人々は限られた數の文學的資料(『詩經』、『楚辭』、『文選』、四史といった古典)を受け繼いで暗唱していたのだが、讀まれるべき詩が何倍も増えたために、「記憶された資料」の喪失を招いたのだ。<sup>24</sup> 杜甫の目の前には暗唱が可能な『詩經』三百篇、『楚辭』の二十あまりの篇、『文選』六十卷のうちの詩の部分があったのに對して、蘇軾は唐の三大詩人の三千首近い詩、『文選』に續く『文苑英華』の一千卷をマスターする不可能に直面していたのである。

最後に、三四一頁から三四二頁において、梅・高は李商隱の「嫦娥」詩を丹念に讀んでいる。彼らの翻譯と注釋はこのように始まっている。

雲母の幕の後ろで蠟燭の影は深い。  
長い河がしだいに落ち、朝の星が沈む。

嫦娥は靈藥を盗んだことを悔やむことだろう。

蒼い海、「そして」青い空「の上で」、夜な夜な「同じ」思い。

雲母屏風燭影深、長河漸落曉星沉。嫦娥應悔偷靈藥、碧海青天夜夜心。

初めの二句は誰か——おそらくは詩人のペルソナが、雲母のとばりの後ろで夜から曉に變わっていくのを見つめている。なぜ彼はかくも孤獨なのか。答えは嫦娥をほのめかすことばのなかで與えられる……。彼女の罪は限界を越えるものだった。この意味において、彼女はすべてのロマンティストの運命を説明している。馬車を星につないで、愛であれ眞實であれ美であれ、ロマンティストは自分が世界のすべてから切り離されていることに氣づく。その運命は最後の句のなかで明らかにされる。……最後の句のなかで、空間と時間は特質として扱われている。

「限界」と「空間・時間」を論じるなかで、梅・高は初めの二句の重要な展開を見落としているようだ。蠟燭が夜の経過とともに融けていくのにつれて、その炎は低くなり

影は壁に登り、色を濃くしていく。同様に、地球の回転によつて長河が「落」ち、曉の星が「沈」み、それは天文学的な時間のなかで嫦娥がいかに意氣消沈しているかを我々に示す。

しかし全體として、この研究は劉若愚とA・C・グラハムの傳統の重要な成果と見なしうることは明らかである。

「複合したイメージ」（それぞれ違った術語と組み合わせられて使われているのではあるが）の強調は、劉若愚の『中國詩の技法』を思い起こさせ、このイメージの發展の歴史は、とりわけ晩唐において、グラハムの『晩唐の詩』を連想させることは、次の部分が證明している（三〇六頁—三〇七頁）。

唐代における近體詩の發展のなかで、時間が進むにつれて、逸脱が頻度も程度も際だつて増加していく。かくして初唐・中唐においては典型的な「白雲」が、晩唐には「黄雲」に置き換えられ、「綠葉」は「枯葉」に、「清光」は「碎光」に變わる。實際のところ、より衝撃的なイメージ、メタファーが頻繁にあらわれることは、晩唐の詩を初唐・中唐と分かつ特徴なのであ

る。

「意味、メタファー、引喩」が後に與えた影響は非常に大きく、ポーリーン・ユの『中國詩の傳統におけるイメージを読む』（一九八七）のみならず、彼女の「メタファーと中國の詩」(“Chinese Literature: Essays, Articles, Reviews” (以後はCLEARと略す) [1981]: pp. 205-224) における隱喩についての議論、彼女の本に對する書評ないし反論、最も著名なものではステイブン・ボウケンカンブ Stephen Bokenkamp の「再び中國のメタファー——中國詩の傳統のなかのイメージを読む、そして理解する」(JASO109 [1983]: pp. 211-221) を生み出してゐる。

次に檢證される研究のなかでは轉義法 (trope) も役割を果たしている。一九八〇年代初期には話のタイトルを「脱構築」で始めた講義が多かつたように、ステイブン・オウウエンも「透明：唐代の抒情詩を読む」(HLAS39 [1979]: pp. 231-251) を次のように語りだしている。

本文のタイトルは學術的な文章における當世風の言い方を示しているが、表題の眞の付け方として、それ

紹介

は輕蔑するよりもよく考えてみる値打ちがある。文學に關する文などで、何かを名付けるのは、名付けられる物の性質について基本的な前提を明らかにする行爲である。論題の最初の語は「透明」である。この段階においては透明というより不透明である。それは西歐の隱喩の規則に従つて、先に延ばされた意味を隠し、約束するものとして讀まれる。それから直喩のしるしであるコロンがあり、それは「唐代の抒情詩を読む」という、傳統的な學術上の言い方による、より安全な世界へ我々を引き戻す、バランスをとつた半分の題を用意することによつて隱喩的ことばを抑えている。しかしながら、隱喩的なことばは完全に抑えられたわけではなく、論題の興味はコロンの兩側の間の分裂に、二つの部分の關係について起こる疑問のなかにのこつてゐる (二三二頁)。

ここには「西歐の規則に従つて」讀んでゐることを認める「非母國語の讀者」が確かに認められる。

しかしオウウエンは『中國詩の技法』を確かに想起させ

る部分において、西歐の規則から文化の規則を一般的に述べることに素早く轉換する。

どの文學の文化においても、テキストそれ自體の内的な要素と同様に文學的經驗の一部である、讀みの技術というものがある。學習された讀み方の技術は、讀者が審美的に文學テキストを知ることができる手段である。一つの文化のなかにさえ、讀者の年齢や階層、そしてまた讀まれるジャンルによって異なる、實に多様な讀み方の規則がある。しかしながら、或る種の共有される規範、意味を形成する過程における基本的な前提もまたあるのであつて、それはジャンルが期待するような、より特殊な規則を考えるより前に、理解されなければならない(二三二頁)。

こうした豫測の一つは、中國の抒情詩は「非虚構的」(二三九頁)であるということであり、「詩は實際に歴史的な詩人の前に呈されている歴史的な時間や光景を描いているものとして讀まれる」(三三三頁)ということである。詩のなかのこうした記述や光景に到達する過程をオウウエン

は「透明」と名付けている。これによって彼が意味するのは、「虚構」の詩のために働くところの「西歐の詩の分離的なメタファーの作用とは質的に異なる」(三三九頁)唐詩に到達する技術である。オウウエンはいう、「中國詩の」テキストは世界全體に面した限られた窓であり、遠くから見ると「ぼんやり」しているが、近づくにつれて輝き、「はつきり」してくる。(二三九頁) この過程を構成している要素のなかには「注意の對象」が含まれている。詩人と世界の双方がその時讀まれる。「讀み」を遂行するためには、「共通の言語、共通の文化的文脈と文學的傳統、そして何よりも、詩の性質の共通の觀念と文學的な讀み方の規則をマスターしなくてはならない」。「中國詩のよく訓練された讀者は、こうした行程を瞬間的、直感的な優美さをもつて遂行する」(二四五頁)ことを我々は知つてゐる。しかし昔の中國のさまざまな文學テキスト・批評テキストから掘り起こされた數少ない「規則」以外に、彼が引くほかの共通性をマスターする手だてはほとんど與えられていない。實際、「ことばと世界の關係」(二三四頁—三三九頁)の議論

のあとで、「詩人を讀む」(二三九頁—二四三頁)へ移ると、そこでは主観性が支配しているように見える。ここでオウウエンは唐詩を「詩(言—寺/言志)、内面状態のことばによる表明」(二四〇頁)として再確認している。これは「渡河到清河作」の詩を讀んだあとに續けて、次のように説明されている。「王維のこの詩において、そしておそらく唐詩の大多數において、詩人を讀むことは比較的單純な問題である」(二四一頁)。唐詩のこの觀念が揺らいでいるために、そして文學的な讀み方のより特殊な規則を示すことができないために、オウウエンは次のような方法で詩人を讀むことになる(これは「渡河」詩の説明である)。

しかし、もちろん、空想は自由でない。見えるのはそれ自體のかたちと力をもった物理的な世界と、詩人の内面状態との間の複雑な相互作用である。地形の無關係な事實が、空想を制御し、ここでは河の光景における劇的で變幻自在なかたちを呈する。隠したりあらわにしたりする力によって、河の光景は人の心のなかに興味と思慕を生み出す能力をもつ。それがたくらむ

視覺的な不在は、欲望を生み出すのに必要な刺激である。このようにして我々は詩人を讀む……(二四〇頁—二四一頁)

このパラグラフ(つまり詩に續くもの)がそれだけでどのようにことば、文化、文學的傳統、詩の本質、文學的讀み方の規則、「詩は志を言う」の觀念の完全な展望になっているのか見るのはむずかしい。むしろそれは單にオウウエン自身の創造的な想像力が詩のテキストの上に作用しているにすぎず、何かほかの創造的想像力によって取り替えることもできるだろうと思われる。これはオウウエン自身のことばにもびつたりする。

「解釋における有効性」はここで我々の關心ではない。意味の安定性はまぼろしである。讀む過程において意味を作り出していくことは、必然的に個人的なことである(二三九頁)。

もし本當にそのとおりであるならば、この論文の目的を理解するのはいつそうむずかしくなる。オウウエンは「讀むことは完全さを取り戻す過程となる。テキストは世界に



對する提喻である（二三七頁）」と斷言しているが、それに續いて、このように認めている。

中國の詩においては、完全さはテキストの外側に、讀みの過程の終わりにある。最小限の自己満足として、唐詩は決して届くことのない完全さへ——曖昧なりアリテイー、手の着けようのない複雑さをもった世界、理解することの完全な失敗へと動く。

結局のところ、オウウエンは解釋の自由な幅を、——正しい解釋は存在せず、劉若愚のようなすぐれた讀み手、「母國語の讀者」ですら「手の着けられない複雑さ」をもったこの世界を支配したとは主張できないような多様性を、擁護しているかに見える。またしても劉若愚の書いたものの引用であるが、劉若愚が詩的世界と詩的言語の文脈のなかで中國詩の位置の虚構性を論じている次のパッセージ、オウウエンが提起するのは完全に異なった觀念、それに對する反論が頭にあったかも知れない。

ここで「世界」とは「現實」の、すなわち時空間的な世界を指し、それは自然世界と個々の人間が生きて

いる人間社會、つまり文化的な世界（フッサールのいう *Kulturwelt*）との双方を含む。この世界と自己との間の相互作用は、それぞれの個人が經驗した、あるいは生きた世界（フッサールの *Lebenswelt*）を構成する。創造的な過程の續く間、作者は想像力のなかで、ほかの可能な世界と同じように、彼自身の *Lebenswelt* を開拓し、この開拓から作者はことばの構造のなかに具體化された世界を創造する。この創造された世界は、現實の世界には存在しないし、存在したこともないが、まず作者の意識のなかに存在し、そしてひとたび創造されると、時空を越えて潜在的に存在し、讀者の意識によって再創造されることになる。<sup>20</sup>

オウウエンの理論から生まれたものとしては、張（孫）康誼の『晩唐から北宋に至る中國の詞の展開』“*The Evolution of Chinese 'T' u Poetry from Late Tang to Northern Sung*” (1980) は詞の歴史をたどろうとしたプリンストン大學出版局の三冊の本のなかでも最も成功したものである。著者自身による要約が新たな試みの最良の點を説明してい

る。

この研究のなかで扱われる五人の詞人、溫庭筠（八二頃—八七〇頃）、韋莊（八三六頃—九一〇）、李煜（九三七—九七八）、柳永（九八七—一〇五三）、そして蘇軾は、詞の發展の早い時期における里程標を表している。……溫庭筠と韋莊は……詞において二大流派となる、まったく異なる二種の文體「を確立した。」……李煜はその二つを統合して新たな詩的な技巧を切り開き、小令の發展の轉換點を作り出している。……柳永の功績は、慢詞と呼ばれる長い形式を開いたことにあり、蘇軾は宋詩の内側に「詞というジャンルを移し替えた。」(xiii)

詞の發展におけるこれら五人の代表的詩人について述べ、彼らの作品を分析した四つの章を通して、著者は審美的、文化的な價値の變化を背景としながら、このジャンルが創造されていく足跡をたどろうとしている。彼女は安祿山の亂に續く混亂を重視する。それは宮女や樂人を教坊から國中へばらまき、妓館を作る動きに刺激を與えたのだった

紹介

（八頁—一〇頁）。彼女はまた都市の發展が新しい様々なタイプの歌を求め、慢詞の勃興に刺激を與えたと考察している（二〇八頁—二〇九頁）。

個々の詞の注釋のなかで、張は傳統的な詞論を自分の基本的な文獻的アプローチへ統合しようと努めている。しかしこの面に限っては、傳統的な批評を引用しようとはしていない。結果は決して満足できるものではない。それにもかかわらず、彼女の詩の扱い方は説得力のある、有効な読み方を生み出している。その読み方は中國の詩に用いられる術語の幾つかを、彼女の先生である高友工の用語さえも、意識的に拒否しているように見える。そうして、溫庭筠の作品のなかに「一句のなかの名詞の並置」というものを名付ける際、助けを借りるのは梅・高の律詩の研究ではなく、西洋の古典修辭學であり、そうした構造を「並列」parataxis（四〇頁）と呼ぶのである。こうした詩人の作品や時代（八五〇—一一〇〇）を「早期の詞」と名付け、詞のジャンルの歴史的發展に關する記述を、こともなげに自分のテキストのなかでまとめ上げるのである。

一九八〇年代のはじめには、もう一つの文學史的な記述が刊行された。ステイブ・オウエンの『中國詩の黄金時代——盛唐詩』“*The Great Age of Chinese Poetry, the High Tang*” (New Haven and London: Yale University Press, 1981) では二百餘首の詩の翻譯と五十首近い詩が考察され、

その數は『初唐詩』(上述)の數より上回るわけではないが、しかしこの本はオウエン自身が冒頭に指摘しているように(vii頁)、はるかに大部であるかに見える。少なくとも、この本を先行する研究に統合しようとする意圖(「テキストに関する注」三三〇頁—三三七頁、及び「文獻紹介」四二七頁—四三四頁)、またテキストを選ぶうえでの細心の過程を明らかにしようとする意圖(「詩についての注」三三八頁—四二二頁)という點で、先の著作より大きいものになっている。オウエンが唐詩の歴史に関する彼の最初の本に與えられた書評を心に深く刻んでいたことは明らかである。

オウエンは自分自身の先例に従って、この時期の詩を最初の段階に準據して名付けている。かくして初唐の「宮

廷詩」*court poetry* は盛唐の「京都詩」*capital poetry* によつて受け繼がれるのである。この用語の選擇は適切であるが、しかし彼自身が「京都詩」を定義しようとした試みはいくらかよろめいている。

京都詩は一枚岩のような實體では決してなく、驚くべき執拗さ、首尾一貫性、文學的價値の持続性をもつていた。京都詩は都の社會の上層階級によつて作られ享受された、社交的な、何かの折りに作られた詩を指している。八世紀の名門に屬する人々は作者・享受者のなかで傑出し、詩人が「世に名を高める」のは、多くの場合ぞういう人々を通してであつた。京都詩においては、律詩に對して最も強い關心がもたれている(ほかの詩型も時には要求されるけれども)。佛教と隱逸のテーマに特別な關心を抱き、社會的な名聲という大きなトピックは、身分の高い人々の田園生活へのあこがれに取り込まれてしまった。宮廷詩の端正さほど嚴格に定められていないにしても、ジャンルの、またサブジャンルの求める端正さは強く意識されている。宮

廷詩と同様に、京都詩は獨立した「藝術」としてよりも社會的な實踐とみなされている。……京都詩の詩人たちの社會的な地位や影響にもかかわらず、その時代の偉大な詩はアウトサイダーによって書かれたのである（xiii—xiv頁）。

このアウトサイダーとは、あとでわかるように、杜甫と李白である。オウウエンは初めに定義を定めようと苦心しているように見え、そのあとでその定義からはずれた所にこの時代の二大詩人を見るほかなかったのであるから、我々は「京都詩」を少し違った角度から眺めてみたいと思う。

ここでいう「京都」も、『初唐詩』における「宮廷」も、必ずしも詩人の物理的な位置ではなく、それぞれの時代の中心を指しているように私には思われる。これを再確認すると、李白と杜甫はこのタイプの詩の代表的な詩人として見ることが出来る。二人とも都に在ることを熱望し、その詩の多くは都の讀者、受容者に向けられていたのである。しかしオウウエンの關心は別の所にある。「京都詩」は、

大詩人である李白・杜甫が乗り越えた獨特のスタイルを發展させた、エリートとその子孫の小詩人グループだけを指すべきだと主張している。

「李白、天才の新しい觀念」（一〇九頁—一四三頁）の章は、興味深い讀みを示している。オウウエンのテーマは、李白は孤獨な人であり、その奇妙な振舞いだけでなく、彼自身の意思によっても他と區別されるユニークな人物であったということである。ここに提示されたたくさんの詩から、李白は「個人として、また詩人としてのアイデンティティーに關心を抱くという、大きな遺産を將來の詩人にのこした」ことをオウウエンは示そうと試みて、李白に就いて「單なる卓越はもはや十分でなく、詩人は卓越し且つユニークでなければならない」ことを論じようとしている（一〇九頁）。このために、後代の批評家は野心的な詩人たちに、模倣するには強すぎ、個性的にすぎない李白を避けさせた<sup>②</sup>と彼は考えている。李白はコネクションも地位もなく「都において成功するために自分の才能に頼るほかなかった」（一一一頁）人であることを述べた傳記の部分（一一一

頁一一八頁)に續いて、オウウエンは多くのよく知られた詩(「蜀道難」、「長相思」、「古風」とあまり知られていない二、三の詩を翻譯して論じているが、それはすべて李白は「自分をほかの者から區別しよう」としていたという考えを補強するためである。

夏日山中

白い羽の扇を動かすのも物憂く、緑の木々のここに裸になつてゐる。

私はずきんをとつて崖に掛け、むき出しの頭は松の木を通して吹いてくる風にさらされる(一二七頁)。

嬾揺白羽扇、裸袒青林中。脱巾掛石壁、露頂灑松風。

それから李白の詩集についてのすぐれた概観と、杜甫と比較しながら李白の傳統に對する態度について鋭いコメントが續く。

李白は詩の傳統と不思議な關係をもっている。過去の詩について彼ほどよく知つていた詩人はなく、また過去の詩の偉大さを彼ほど輕視した詩人もいない。李白は恥じることもなく、過去の詩人から有名な語句や

一句まるごと借りているが、ほかの詩人の才能に心から向かい合つたことはなかつた……對比的に、杜甫は文學の過去を詩句の膨大な集合としてではなく、一連の力に満ちた聲として受け止めた。詩人として、杜甫はそうした聲を自分のものとして、他とは違つて、自身自身の聲にしようと努めたのだつた(一四一頁)。

この章にもまた次のような興味深い餘談が入っている。

唐の詩は後の王朝の詩に見られるような強い地域的な區分がなかつた。大きな地域的區分は二つの首都のまわりの地域とそれ以外の地とだけであつた。しかし二つの部分が詩人の地域的なアイデンティティを展開し始めていた。東南と四川である(一二二頁)。

この章やほかでも京都詩についての鋭い觀察、テーマと直接關わる觀察に加えて、このようなコメントがされているが、しかしそれは多くの傳記的な敘述や緻密な讀みの間でいともあつさりと思われてしまつてゐる。

結局、この本におけるオウウエンの文體は人を戸惑わせるものである。或る書評は「オリンピアン(譯注…オリン

ボスの神のように山上から見下ろすの意。」と呼び、或る書評は「ウォルター・クロンカイト（譯注：アメリカの有名なニュースキャスター）のような長老風の確信をもっている」<sup>24</sup>といい、また「自立的文學性」 autonomous literacy とか「隱喩性」 metaphoricality とかいった新造語が多く、オウウエンが自分に課した重要な仕事をいっそうむずかしくしていることがある。が、結局のところ、この本は中國文學史の最も重要な詩の時代に關する、西歐のことばで最初に著わされた、刺激的な研究である。さらに彼の譯した何百という詩が、讀者それぞれがこの説明をよく考え、洗練していくことを可能にしている。

劉若愚の『言語間批評——中國詩の解釋』“*The Interlingual Critic, Interpreting Chinese Poetry*” (Bloomington: Indiana University Press, 1982) は、早い時期の論文をまとめたものだが、新作も収録している。この本は「中國詩の技法」ほどの反響を勝ち得なかつたとはいえ、實際には中國古典詩の讀み方をめぐって、ステイーブン・オウウエンをはじめとする批評者たちとの間に劉若愚が引き起こした

「論争」の最後の意見である<sup>25</sup>。一九七〇年代後半の互いの研究に對する一連の書評のなかにオウウエンをおいてみると、次の箇所における敵が誰であるかを見つけるのはさほどむずかしいことではない。

おおまかに言えば、中國の詩について書く英語の批評家には二種類ある。中國に生まれ、教育を受けたが、英語圏で生活している、中國語を母國語とする人々、……そして中國語を大學で學び、中國の文學を教えた研究したりする職業についている、英語その他のヨーロッパ語を母國語とする人々、である。

劉若愚が「中國詩を讀み、譯し、解釋することの問題」を提起し、最後に彼自身の「中國詩への最近の接近」(xviii頁)を記しているのは、この二分法が頭にある。「最近の」ということばがここでは重要である。それは劉若愚が二十年前にいかにも中國詩に接近するかについて「中國詩の技法」を書いた時期から彼の位置に變化があつたことを示している。そして彼自身それを認めている。「この本は」二十一年間の……英語で書かれた……著作、論文、學位論

文、そのすべてが中國詩の批評的研究である……と稱していること」「への反論である」(ix頁)。

公平にアプローチしようとして、劉若愚は「母國語の讀者」と彼が呼ぶものを作り上げる(劉若愚が北京で生まれたことから最近の學問に至るまで詳細にたどった(xii頁—xiv頁) 自身身のバックグラウンドをモデルにした勝手な生き物)。それから彼は「能力のある話者」と「能力のある讀者」との類似を描き、その本を書き始めた考えを繰り返しながら、「母國語の讀者」を試験しようとする(一八頁)。

中國古典詩の「母國語の讀者」と私がいうのは、中國で生まれ、育ち、現代中國語の何か方言を母國語としてしゃべり、子供の時から古典中國語を読み書きしてきた人のことである。「非—母國語の讀者」とは、母國語が中國語でなく、成人してから古典中國語を読むことを學習した人のことである(いずれのカテゴリーにも入らない人は、ケースしだいで「準—母國語」或いは「半—母國語」の讀者と考えられる)。

このあとで、これら二つのタイプの讀者の長所を客觀的

に計っていると劉若愚は思っているようだが、「能力のある讀者」對「能力のない讀者」という文脈のなかで、「非—母國語の讀者」のようなことばを選んだこと自體、彼の主張を偏見で染めている。この「母國語の讀者」は中國古典詩に對して、一語一語解讀しようとするよりも、「全體として」反應するものであるとわかると、大部分の西歐の讀者は中國の詩を鑑賞することができないと劉若愚が考えていることは明らかである。

こうした主張には二つの効果がある。第一は、「母國語の讀者」の數を、劉若愚を中心とした一握りの老大家に制限することである(博學な私の先生たち、中國人の老先生たちの誰一人、古典中國語を書かなかつた!)。これは若い中國人學者のほとんどを閉め出してしまひ(彼らは古典中國語を書く訓練を受けなかつた)、そうした若い注釋家をポストモダン批評へと驅り立てる要素であつたのは確かである。第二の効果は、中國の詩を本當に味わう能力を文化的な(民族的ではなく)文脈に置くことによつて、ステイブソン・オウエンのような西歐の學者が中國古典詩を味わう機會を

否定することであつた（オウウエンの多くの本と、それに對する、ほとんど同じくらい多くの劉若愚の書評のあとで、オウウエンは間違いなく窮極の「非—母國語讀者」を代表することになつた）。これにはオウウエンに選擇の餘地はなく、三年後に出了た彼自身の『詩學』アルス・ポエティカによつて答えなければならなかつた（後述の「中國古典詩と詩學——世界の豫兆」の要旨を參照）。

一九七五年から一九八〇年代にかけての十年間は、オウウエンと劉若愚の間の生産的な敵對關係を特色としてゐることは今や明らかであるが、二人ともアレゴリーにはあまり興味を示していない。高・梅の「意味、メタファー、引喩」（上述）だけがその問題に觸れている。オウウエン、劉若愚、高・梅は中國古典詩の讀解と解釋の多くの相についてパラダイムを提供したが、中國のアレゴリーについては本格的な研究がアメリカで始まつたのは、チャールズ・ハートマン Charles Hartman の「異邦の語——柳宗元の別の聲」(CLEAR 4 [1982] 三三頁—七三頁)である。ハートマンの研究は(1)アレゴリーは「中國において文學的な

方法のおそらくは大きなもの」であると論じてゐること、(2)この方法の中國・西歐の副次的研究を注意深く調べてゐること、<sup>②</sup>(3)柳宗元(七七三—八一九)の六首の詩(「行路之難」三首、「龍鷹詞」、「放鶴鳴詞」)の解釋を通してアレゴリカルな詩をいかに讀むべきか丁寧に説明してゐること、その三點によつて重要である。何がアレゴリーであるか決めるために、ハートマンは葉嘉瑩の考えを當てはめてゐる。<sup>③</sup>葉嘉瑩はアレゴリーは「作者の狀況、詩全體の内容、詩の外側のエピソード」(「作者之身世・詞意之全部・詞外之本事」という三つの事に依存してゐると論じてゐる。ハートマンも結論において、これら三つの基準は讀者にとりわけ歴史をよく知つてゐることを要求すると指摘してゐる。

過去の中國人は「文史不分家」が双方に作用すると考へてゐる。傳統的な中國では文學を歴史的な文脈から切り離して讀んだり、或る時期の歴史を文學を讀まずに研究したりする學者はいないと考へられてゐる。中國の歴史が無味乾燥で時代の感情的な面を判斷する



材料に全體として缺けているように見えるのは、中國の歴史家が歴史の事實から離れた相については想像的な文學が讀まれると假定しているためであることは疑いない。中國のアレゴリカルな文學は歴史と文學の間に重要な橋をかけている(七二頁)。

この議論は、「アレゴリーは儒學の解釋學における最も基本的な方法である」(二三頁)というハートマンの主張を支えている。

アレゴリーに關する仕事に加えて、チャールズ・ハートマンは『インディアナ大學中國古典文學必携』“*Indiana Companion to Traditional Chinese Literature*” (Bloomington: Indiana University Press, 1985)に關わる編集チームの一人でもあった。この仕事はウィリアム・ニーハウザー、William H. Nienhauser, Jr. によつて編集され、十編の全體的な論文(佛敎文學、劇、小説、文學批評など、そして詩はハートマンによる)、續いて作者、書名、學派など五百を越える項目を含んでいる。このようなりファランクスは英語では最初のものである。標準的な項目は著者やテキストにつ

いて千語程度で基本的な情報が書かれ、それに版本、(西歐の語と日本語への)翻譯、研究文献が付されている。<sup>28)</sup>

一九八五年はまた、ステイーブン・オウウエンの『中國古典詩と詩學——世界の豫兆』“*Traditional Chinese Poetry and Poetics—Omen of the World*” (Madison: University of Wisconsin Press)が刊行された年である。その本を彼はこのように解き明かしている。

ほぼ十年以上の歳月を掛けて形をあらわしたものであり、文學史が扱うことのできない詩の相に對する文學史家の不滿である。讀むことには何か參考にする枠組みを作ることが必要であるとはいへ、系統的な解説は行爲を裏切り、我々を迷わせ、詩の讀者としてめいづばいの自由を忘れさせることがある(vii頁)。

自由とは何か。劉若愚、梅祖麟、高友工が規則を敷いたのではなかつたか。オウウエンが彼らの批判に不滿なことが明らかになる。そしてすぐに彼が明らかにするように、「この本は中國詩の技法への入門である」(二三頁)。ひっくり返されたのは劉若愚であるが、オウウエン Owen も

かさまになって「Omen」になった。この本はオウウエンの先行者たちと違って、系統的なアプローチを試みることはなく、そのかわりに Owen-Omen に示されるように、逆さまのままである。しかし何もかも目がまわるわけではない。

読み手は何の危険もない。我々は人の命とか國家の運命とかを扱っているわけではない——これは單なる詩なのだ。そしてあなたや私が読み間違いをしようと、詩は生き続けるのである。それは讀まれたり讀み間違えられたりするのを千年も待ち續けてきた。それは丈夫で、次の千年も生き延びることだろう。我々がその眞實を解き明かそうと作り出すどんな亂暴な空想にも完全に耐えることだろう。こうした詩に對して思惑の枠組みを作る時には、「これは本當か」と尋ねてはいけない。そうではなくて、「私が讀む時に、もしこれを本當だと考えると何が起こるか」と尋ねなくてはいけない（四頁）。

と、オウウエンが書く時、母國語—非母國語の區別はこ

紹介

こで後退しているのがわかる。そして先にオウウエンは「解釋における有効性は我々の關心にない」（上述の「透明」についての論を参照）と主張していたことを思い出す。

遊びの精神にあふれた書名のあと、我々は二つのプロローグに出くわす（好きな方を取れ！）。そして七つの章が續く。最初の「世界の豫兆・中國の抒情詩における意味」は杜甫の「旅夜書懷」とワーズワースの「一八〇二年九月三日、ウェストミンスター橋の上で作る」詩との比較から始まる。杜甫の詩は歴史的な事實に基づいていることにオウウエンは氣づく。

杜甫のことは特別な種類の日記の一條であって、その強烈さと直接性において、まさにその瞬間に起こっている經驗を表している点において、ふつうの日記とは違っている。……この詩の偉大さは、詩的な創造によつてではなく、詩人がこの瞬間と光景に遭遇した幸福な機會を通して現れる（一三頁）。

一方、ワーズワースの詩は、「歴史的なロンドン」ではなく、「非現實的な意味に向けられて」（一四頁）いる。こ

のようにして西歐の詩は讀者にとつて「すべてメタファーであり、フィクション」であるが、それに對して、

杜甫の讀者にとつて、この詩はフィクションではない。それは歴史的な時間のなかの経験を、世界に出會い、解釋し、反應する人間の意識を、事實に基づきながら獨特の敘述をしたものである。そして次には讀者の方が後の歴史的時間において、詩に出會い、解釋し、反應するのである（一五頁）。

この理論的な枠組みは、中國人であれ西歐人であれどのような讀者でも、中國の詩に出會い、解釋し、反應することができると強調しているように見える。

この章は架空の對話で終わっている。

或る人の問い…個人的な、特別な經驗をもっと大きな秩序の型に絶えず結びつけると、詩は經驗の強烈さを失うことになりませんか。……宇宙的秩序の大きさに枠付けられて、すべての喜び、怒り、情熱は普通の型の一時的なあらわれに融解してしまうのではないのでしょうか。西歐の詩ののしりやきつい風刺、情熱の

詩、祈りの詩、酒に陶醉した詩はどこにあるのでしょうか。

私の答え…それには一連の李——李白・李賀・李商隱によつて答えましょう。そのような詩が本當に存在していることを何十も例を挙げることができるでしょう。しかし全體としては、あなたの言うとおりです。穩健さが行き渡り、穩健でない所には抑壓がある——言つてはならないことがあるのです（三三頁）。

この形式はよく知られている。揚雄（紀元前五三—紀元後一八）のような昔の哲學者が用いた「或曰」、「子曰」という架空の對話が響いている。それを含蓄することによって、オウウエンは自分を答える側、「子」と一體化している。

第二章、「透明——中國の抒情詩を讀む」は先だつて發表されたものであるが（上述）、次の章「實在しない世界——コスモロジー、觀念、對句」は、とりとめがないようでありながら興味をそそるかたちで對偶について述べて、それが杜甫の詩の二つのおもしろい讀み方となっている。「聲」というのが、第四章のタイトルである。いくつつかの

唐詩における詩人の聲を調べることによって、オウウエンは譯者と詩人との間の關係の精神分裂病的な告白へと我々を導く。

觀念それ自體において、翻譯は書くことのなかでも最も自分を消してしまふ形式である。まじめな譯者はほかのどのような形式で書くよりも自由がない。すべての句、すべての語において、譯者は自分が述べることをほかの誰かがすでに云つたことに苦心して従わせるのである。……

そしてもうひとつのヴァージョン。

翻譯は書くことのなかで最も自分を目立たせるものである。それは實際は支配しようとするわがままな行爲である。翻譯者は別の人の書いたものを自分が書きたいように形作り、それを詩そのものとして提示する。

翻譯者は元のテキストを置き換えるのである(一一二

頁―一二三頁)。

これは非常に愉快である。そしてかなりの眞實が含まれている。

紹介

遊びは第五章「授業を學ぶ」にも續き、そこにはオウウエンの中國古典詩へのアプローチがさらに懷抱されている。今度はソクラテスの對話のかたちをとって表されている。

ソクラテス…そう、アイオン君、君は古いわなに捕らえられている。君が筆を取る時、いったい何を知っているのか。

アイオン…私はこのことを何千年も考えてきました。そしてホメロスを杜甫に引き渡してから、答えられると思います。

ソクラテス…君が賢い人だということは前からわかっていた。そして君が云わなくてはいけないことを興味深く待っていたのだ。

アイオン…ソクラテス先生、私は詩について何もわかっていないようです。私はいつもこれからわかる状態です(一六六頁)。

この段落ではもう一度中國古典詩の多義性を強調し、遊びの場を高みに引き上げて、中國の母國語の讀者にすらそこには何も見出されるべき「固定した」意味はないように

思われる。

第六章「反抗」、第七章「言述の特別なたち」を通り越して、最後の章「孤立」を見よう。それは時々、或いはすべて、「離れている」詩人の詩に焦点をあわせているけれども、章のタイトルはオウウエンが議論してきたことの多くに廣がっているように私には思われる。我々は一人ひとり、孤立して、中國の古典詩から引き出す特別な意味があるのだと。このアプローチの危うい點は、「支配する行為」の譯者（上の段落における第二のタイプの譯者）という意味において、中國の詩を自分自身のイメージのなかに作り上げるオウウエンのような創造力を我々の誰もが持っているわけではないことである。このことは劉若愚も關心をもっている。彼は自分の『中國詩の技法』がオウウエンのおもしろくて、しばしば才氣をみせる本によって少しも脅かされることはないと考えている。書評のなかで劉若愚はオウウエンが「中國の詩や詩人を越えたこと」を扱っていて、「……つまるところ、『世界の豫兆』よりもオウウエンの世界を明らかにしている」と書いている。<sup>②</sup>この本の冒頭で

オウウエンは中國詩の自分自身の技法を確立すると主張しているが、それによって劉若愚に取って代わるよりもむしろ、詩を読む際の自分一人の規則を述べるだけで満足しているように見える。そしてその規則は不幸にもオウウエンだけにしか當てはまらないのである。

しかしオウウエンは孤立しているわけではなく、漢から唐代までの詩の發展に關する一九八二年のワークショップの論文集を編集している。オウウエンと林順夫の編になる十二編の論文を集めた『抒情詩の生命力——後漢から唐代までの詩』“*The Viarity of the Lyric Voice, Shih Poetry*”

*from the Late Han to the T'ang*” (Princeton: Princeton University Press, 1986) は、劉若愚、ポール・クロール Paul Kroll、王靖獻、ハンス・フランケル（オウウエンの先生）、高友工（林の先生）、そして編者二人の論文が收められている。それは三つの部分に整理されている。(1)「理論的基礎」(すべての時期、すべてのジャンルの中國古典詩を扱う論文)、(2)「觀念と文脈」(古典詩を知る參考文獻の枠組みを扱う)、(3)「形式とジャンル」(詩の様々な形について)

オウウエンと彼の同僚たちが詩の發展の多様な相を考えていた時に、張(孫)康誼もまた同じ問題について考えていた。彼女の研究は同じ年に『六朝詩』<sup>68</sup> *Six Dynasties Poetry* (Princeton: Princeton University Press) として出版された。先に詞の歴史の専門家として自分を確立したのちに、彼女は三〇〇年から五〇〇年にかけての時期の「新しい詩」の發展を説明しようとして、詩に方向を轉じた。この新しい韻文は詩を政治の中心に移動させたが、しかし「自分自身の自己意識」(xii頁)を變えることによつて「政治を超越する」ことができる人々もあらわれた。張は五人の代表的な詩人、陶潛(三六五―四二七)、謝靈運(三八五―四三三)、鮑照(四一四頃―四六六)、謝朓(四六四―四九九)、庾信(五一三―五八二)の作品のように、この新しい詩歌において感情の表現(情)と自然の描寫(景)という兩極が一つに解け合う過程を追跡している。

一年後に、(劉若愚の)もう一人の「學生」、ポーリーン・ユ Pauline Yu が彼女自身の中國詩の理論的技法である「中國詩の傳統におけるイメージを読む」<sup>69</sup> *The Reading of*

*Imagery in the Chinese Poetic Tradition* (Princeton: Princeton University Press, 1987) を出版した。その本は彼女の先生の研究を一面では價值を高め、一面ではそれに取つて代わるものである。始原から唐の終わりまでの詩を扱つてはいるが(以後の發展については二、三頁述べている)、『詩經』と「離騷」に關する第二章、第三章が特別な意味を持った洞察を示している。ユは「詩經」の傳統的な解釋はアレゴリーには踏み込まず、特に歴史的な人物や事件と關連づける、彼女が「文脈化」contextualizationと呼ぶものによつて詩を讀んでいると論じる(七六頁)。この觀念は「のちの批評において支配的な傳統になり」(七六頁)、それによつて中國の詩は歴史的事件に基づいているというオウウエンの考えを支持している。「かくして、西歐における教訓的な文學の目的は、世界の像があるべき姿であらわすことがふつうであるが、それに對して、中國の教訓的批評の文學の見方は、世界が實際にそうであった、或いはそうであるものとして、世界から教訓を引き出す。「離騷」の傳統的な讀み方を評價するなかで、ユは「悲しみに出會う」

ことが働かせるイメージは、詩の暗黙の主題に置き換えられることになる」、そして「離騷」は中國の詩的傳統においてそのような方法の最初の重要な例である」と結論を下している（一一二頁—一一三頁）。ユが「代用」と名付ける

この方法は、「詩は基本的に經驗された刺激に對する非虚構的な反應をあらわすという假定」に基づいていて、「代用されたものと並置されたものとの間の形式上の差違を消す、實際の歴史的な記録」として捉えられる（一一六頁。上述したオウウエン『中國古典詩と詩學——世界の豫兆』における似たような意見を参照されたい）。中國古典詩において『詩經』と「離騷」はイメージの二つの異なったモデルを作り出したというユの主張は發展の可能性がある。文脈化と同じように代用を考えることによって、この本は詩に對抗する歴史の役割を提起し、アレゴリーについて眞剣に考えさせる。これは中國古典詩に關する西歐の理論的な研究のなかで見逃されてきた問題であったので（上述したチャールズ・ハートマンの“Alienloquium”を顯著な例外として）、ユの研究は彼女の師である劉若愚と、彼女のライバルであるステイーブ

ン・オウウエンの理論よりもずっと廣い範圍にあてはめることができる。

次の研究、デーヴィッド・R・マッククロウ David R. McCraw の『十七世紀中國の抒情詩人たち』“*Chinese Lyricists of the Seventeenth Century*” (Honolulu: University of Hawaii Press, 1960) は、マッククロウの師である劉若愚の『北宋の大詩人』（上述）をモデルとしている。マッククロウは中國の詩は世界と言葉に對する解釋であるとする劉若愚の考えに従つて、清の抒情詩の歴史の最もよい例證であり最も大きな影響を與えた六人の詩人を選んだ。陳子龍（一六〇八—一六九七）、吳偉業（一六〇九—一六七二）、王夫子（一六一九—一六九二）、陳維崧（一六二六—一六八二）、朱彝尊（一六二九—一六七二）、納蘭性德（一六五五—一六八五）である。翻譯された詩は詩人の視野と文學的な技術の両方がかかるように工夫されている。しかしモデルとなった劉若愚とは異なり、それぞれの章は短い傳記的な記述で始まり、これら清の詩人と先行する宋の詩人との比較も含まれている。マッククロウの翻譯は實驗的なものであるが、う

まく行つた時にはそれ自體で印象的な詩となつてゐる。この本は劉若愚、林順夫、孫康誼によるプリンストン大學出版局の詞の歴史に續くものとみることとできるが、ここには詩に關する技術的な議論はきわめて少なく、翻譯されたテキストに漢字が添えられているだけである。

ステイブン・ヴァン・ゾウレン Stephen van Zoeren の「詩と人——傳統的中國における讀解、注釋、解釋」  
『Poetry and Personality—Reading, Exegesis, and Hermeneutics in Traditional China』(Stanford: Stanford University Press, 1991)は、中國の古典である『詩經』に關する學の傳統をたどる、西歐では最初の研究である。ヴァン・ゾウレンはステイブン・オウウエンの學生であるが、この古代のアンソロジーを讀み解こうとした主な注釋を、孔子から『左傳』・『荀子』・『大序』・『五經正義』・『毛詩指說』・『詩本義』、そして宋初期の程兄弟の書いたものを經て、ヴァン・ゾウレンがすべてを總合したものと考える朱熹(一一三〇—一二〇〇)の『詩集傳』と「詩序辯」まで、時代順にたどつてゐる。この本は洞察に富み、細部まで詳しく、

そしてきわめて多くの重要な注釋家に觸れてゐるところから、一般的な中國の訓詁の學の歴史として讀むこともできる。

訓詁の問題は次の研究、ホーン・ソシー Huan Saussy の『中國美學の問題』『The Problem of Chinese Aesthetic』(Stanford: Stanford University Press, 1993)も關わつてゐる。この本は先に記した中國古典詩におけるアレゴリーの研究の貧弱さを補う重要なステップである。ソシーの研究は視野が廣いものであるが、ここではライブニッツやヘーゲルについての論は無視して、全體としては中國のアレゴリーを、個別的には『詩經』の讀み方を扱つてゐる四つの章(第一章—第四章)に焦點を絞ることにしよう。ソシーはポリーン・ユの文脈化の概念を拒絶する。『詩經』のなかの數首の詩を綿密に讀むことによつて、allegoresis というのも役に立たない術語だと見なす。それどころか彼は「大序(そして毛傳の全部)は……歴史を語つてはゐるが、しかしその問題を何か、……簡單には歴史とは呼べないもの……(むしろ)ありうる倫理的世界の敘述とみなしてい



る」(一〇五頁)。これらの「モデル行動」は個々の詩の出來事を再現することができる。寓意を讀むのではなく、むしろ「お手本を讀む」のである。自然の時間は倫理の優先に道をゆずる。しかしソシーは毛詩の解釋の傳統は「詩人か寓意的な歴史」しか知らないと考える。「語られる出來事を生み出すから、詩人」であり、出來事を語ることで手本となる出來事を生み出すことが、言語的な相は異なるけれども、同じ言葉によって生み出されるから「寓意的」である。古典のテキストにおける言語的な相を決める仕事がある。ここに……。中國の美學の中心となる問題である」(一九九頁—一五〇頁)。ソシーの研究はポーリン・ユが扱った領域を再び調べ、そしてまた中國の詩が歴史に基づいているという觀念に對して挑戦している。

ホーン・ソシーの本が出版されて一年後に、コンフェレンスの成果をまとめた本がもう一冊あらわれた。ポーリン・ユが編集した『中國における歌謠の聲』『*Voices of the Song Lyrics in China*』(Berkeley: University of California Press, 1994)である。これは類似の論文集のなかでは最上

のものである。ここにはすぐれた文献目録とユの序文が收められ、編集は行き届いている。林順夫の「詞の固有のアイデンティティーの形成」、ポーリン・ユの「歌謠と規範——詞のアンソロジーを見る」、ロナルド・C・エーガンの「北宋における詞の世評の問題」、ステュアート・H・サージェントの「宋代における歌謠の文脈——コミュニティの技術、社會の變化、道徳」、ダニエル・ブライアントの「起源不明のメッセージ——南唐二主詞のテキストの傳承」、すべての論文が西歐における抒情詩研究の新しい領域を切り開いている。

この概観を締めくくる最後の年にふさわしく、一九九六年には中國古典詩研究における最も重要な研究がまたしてもステイーブン・オウウエンによって書かれた。『中國「中世」の終焉——中唐の文學・文化論集』『*The End of the Chinese Middle Ages: Essays in Mid Tang Literary Culture*』(Stanford: Stanford University Press, 1996)は、オウウエンの唐詩研究のおそらく極地であり、そしてこの二十年間の中國古典詩に關する彼の七冊目の本である(ここでは

すべてを取り上げたわけではないが。この本は次のように率直に語り出されている。

この論文集は、唐詩の歴史に關する私の最後の本——盛唐を扱ったそれから十五年後にあらわれたものである。この期間、初唐、盛唐に續いて中唐の詩の本を出す計畫があるか、しばしば尋ねられたものだった。この本に收められた諸論文はそのような中唐詩の歴史を書くことが不可能であることを部分的に答えている

(一頁)。

しかしこの放棄の聲明に續いて、この時代の問題を中唐の詩と傳奇という二つのジャンルにおいて論じている一連の論文を實際には讀むことになる。ここには造物主、自然、ミアチュアの世界、個人的な所有、個人的な領域、隱逸、ロマンス、ウィットなど様々なものが含まれている。こうした問題に對するオウウエンの觀察は刺激的な讀み方を作り出す。全體としての確な中唐詩の翻譯は、なかにはこれまでほとんど知られなかった詩も含めて、實例を提供している。實際、テキストがのこす印象は、我々はこの時代の

紹介

終わることのない文學史を持っているということである。

中唐の詩は「(演出された) 經驗、そのために物理的に整えられた空間に對應している」、つまり「意圖的でない表現というよりむしろ、何か組み立てられたもののように考えられる」(五頁)というオウウエンの意見は、しかし、歴史上の變化であると同様に、彼自身の古典詩についての考え方の變化をあらわしているだろう。

ここで心配になるのは、この本の「孤立性」である。オウウエンは彼の最初の本のスタイルまで後退した。ここでは學問的な枠組みや文献目錄を用意しようとしてもしない。入門前の讀者はオウウエンの中唐詩研究は世界中で最初のものであるかと思ひこむかも知れない。この態度は本の最初の頁から見られる。きわめて多くの論が中國語や日本語で書かれているのに、中唐詩の歴史は不可能であるなどとオウウエンはどうして主張できるのだろうか。少なくとも、中唐詩の論文を著わした人々はなぜ自分が失敗したのか、オウウエンに説明してもらおう権利がある。そして實際のところ、この著者が放棄したというにもかかわらず、この本は、そ

の書評とともに、中唐の詩への基本的な入門書となつてゐるのである。

### Ⅲ 結 語

過去二十五年間にわたつて書かれてきた中國古典詩に關する書物、論文を三十以上、見てきた。この數字は平均して毎年一冊以上の優れた刊行があつたことになる。また高友工、劉若愚、柳無忌、アーヴィン・ロ、梅祖麟ら、一九四〇年代後半にアメリカに移住してきた中國語を母國語とする學者たちが、アメリカにおける中國古典詩研究全般を最初の時期（一九六二年～一九七五年）を支配していたことも見てきた。彼らは教え方を確立した、母國語を話す「批評家」であつた。劉若愚の學問と理論が支配し、カリフォルニア、コロンビア、インディアナ、ウィスコンシン、イェールの各大學の出版局はこの領域における重要な書物の多くを出版してきた。

一九七五年以後、これらの批評家の學生たち、とりわけ張（孫）康誼、チャールズ・ハートマン、林順夫、ステ

イーブン・オウウエン、ポーリン・ユらが、師の教義と技術に磨きをかけ、時には再定義しようとした。彼らは母國語に近い「青年學者」であり、その多くは最初に「ひまわりの輝き」のグループに加つた者であつた。彼らの出版の場はやはりコロンビア、インディアナ、プリンストン、イェール大學の出版局であつた。この若い世代の中でも筆頭はステイーブン・オウウエンであり、十年近く劉若愚と角逐したあと、ほとんど十五年の間、毎年大きな出版をすることによつて、この領域を、そしてまた劉若愚を壓倒したのだつた。しかし文學的な高地を奪い合うこの鬭争のコースは高くついた。オウウエンの才知とエネルギーにもかかわらず、一九七〇年代終わりと一九八〇年代初めにチャールズ・ハートマン、高友工、梅祖麟、デイヴィッド・ラティモアの研究のなかで重要な問題であつた引喩と寓意の詩は、オウウエンの關心を引くことなく、今日、領域の周邊にのこされたままである。<sup>②</sup>

さらに、劉若愚の「母國語の話し手」を克服するために、オウウエンは「讀む過程において意味を構成することは、

必然的に個人的なものである」(『透明』一三九頁)と断定せざるをえなかった。もしこの原理が中國の詩に近づくアメリカの學者の、まだ名前のない第三の世代に感化を及ぼしたり、今日、中國の詩に關する本に携わる出版社の編集者(一九九〇年代にはスタンフォード大學も含むまで廣がっている)に影響したりしたら、それはこの分野における悪い豫兆になることだろう。

しかし一九九〇年代のアメリカにおける全體的な研究が持續的に成長していることは、おそらく私の心配に對する最も明晰な反證であろう。この紹介の第二部では、個別的な詩人や詩作品の研究が同じ時期にどのように行われていたか、いつそう包括的な結論を導くべく、探っていくことにしよう。

## 注

- ①⑨ 「想像的言語」を「想像的・隱喩的言語」に擴大したり(三三七頁)するような「再定義」の或る部分、或いはまたシNTAXとテクスチュアを分析的言語と隱喩的言語に關係づけて論じること(二八六頁)などは、同じことの繰り返しで不必要なものと思われる。

②⑩ 記憶された資料については、『インディアナ中國古典文學必携』“*Indiana Companion to Traditional Chinese Literature*”, William H. Nienhauser, Jr., 編 (Bloomington: Indiana University Press, 1985) p. 69 © Charles Hartman “poetry”を参照。

②⑪ 晩唐詩のイメージについての劉若愚の印象は、資料を廣く讀みこなした基盤に立っていて、確かに全體としての確ではあるが、索引を用いれば非母國語の讀者でも詩語を細かく檢索することができる。たとえば晩唐の二人の多産な詩人、李商隱と皮日休(八三三頃―八八三頃)の索引を調べてみると、「青葉」は晩唐の詩ではふつうでなく(どちらの詩人にも用例がない)、劉若愚の説が證明されるが、「白雲」の方はこの二人の詩人においてはまだふつうの語であったこと(李商隱は六回、皮日休は三回用いている)、「黄雲」はどちらにも見られないことがわかる。愛用された、そして著しく新しい語は「青雲」(綠の、或いは黒い？雲)であり、李商隱には二回、皮日休には五回見える。

②⑫ 劉若愚「中國と西歐の文學理論」(*Journal of Chinese Philosophy*, 4 (1977): 1-24) この一篇の論文の間には少なくとももう一つの對比がある。著者・世界・讀者・作品の間の關係に關する議論である。

②⑬ しかしオウエン自身も記しているように、李白の集には彼自身の作でないかも知れない詩がたくさん含まれていて、

それは少なくとも何人かの詩人は彼の文體を實に見事に模倣することができたことを示している！（一四一頁を参照）

- ⑳ ドナルド・ホルツマン (OLZ 80 (1985): 84) 劉若愚 (CLEAR 4 (1982): 96) の書評を参照。

㉑ この本に續いてオウウエンの研究についてはかの書評があり（ここにもそのいくつかは記した）、リチャード・ジョン・リン編「ことば・パラドックス・詩學——中國の全體像」"Language Paradox Poetics, A Chinese Perspective" edited by Richard John Lynn (Princeton: Princeton University Press, 1988) という著者の死後に出された本もあるけれども、この本のあとでは劉若愚は眞劍なライバルとしてオウウエンに關心をもつことは薄れていったようだ。

㉒ この概観のほかのところで記した書評のほかに、劉若愚はオウウエンの「孟郊と韓愈の詩」"The Poetry of Meng Chiao and Han Yu" (New Haven: Yale University Press, 1976) にも書評を書きつづら (HJAS 36, (1976): 294-297)。

㉓ ハートマンの最初の仕事は段醒民の「柳子厚萬言文學探微」(臺北 文津、一九七八) の書評であった。

㉔ 葉嘉瑩「詞論における常州詞派」(HJAS 35 (1975): p. 114) を参照。

㉕ 元の五百の項目の上に、五十を越える新しい項目を増し、最近の文獻目録（一九八五—一九九六）を加えた第二版は、インディアナ大學出版社から一九九八年に刊行される豫定で

ある。

- ③⑩ JAS 45 (1986): 589頁。

③⑪ この時期からのオウウエンのその他の研究は本稿の付録、また第二部で論ずる豫定のものを参照。

③⑫ これはオウウエンが中唐以後の唐詩の歴史を追求しない理由の一つであろう。晩唐の詩にはそうした文采で輝いているのだから。

附：アメリカにおける中國古典詩研究主要文獻目録 一

九六二—一九九六

第一部 詩の全般的研究

1962

James J. Y. Liu 劉若愚: *The Art of Chinese Poetry*. Chicago: University of Chicago Press.

Reviews (hereafter "Rev"): Hans H. Frankel, *HIAS* 24 (1964): 260-70; D. R. Jonker, *T'oung Pao* (hereafter *TP*) 52 (1966): 170-4; James Robert Highower, *JAS* 23 (1963): 301-2; Gunther Debon, *JACS* 83 (1963): 385-6; David Hawkes, *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* (hereafter *BSOAS*) 26 (1963): 672-3.

- Burton Watson. *Early Chinese Literature*. New York: Columbia University Press.  
 Rev. D. C. Lau, *BSOAS* 27 (1964): 645-6.
- 1963  
 Irving Yucheng Lo. "Problems in Translation and in Teaching Chinese Poetry," *Literature East & West* 7: 29-58.
- 1964  
 Lai Ming. *A History of Chinese Literature*. New York: John Day.
- 1965  
 Wu-chi Liu 柳無忌. *Introduction to Chinese Literature*. Bloomington: Indiana University Press.
- Cyril Birch. *Anthology of Chinese Literature*. 2 v. New York: Grove Press.
- A. C. Graham. *Poems of the late T'ang*. Baltimore and Harmondsworth: Penguin.
- 1967  
 Burton Watson, translator. Yoshikawa Kojiro 吉川幸次郎. *An Introduction to Sung Poetry*. Cambridge: Harvard University Press.
- J. D. Frodsham and Cheng Hsi, trans. *An Anthology of Chinese Verse, Han Wei Chin and the Northern and Southern Dynasties*. Oxford: Oxford University Press.
- Rev. D. R. Jonker, TP LV(1969): 327-32.
- 1968  
 Kao Yu-kung 高友工 and Mei Tsu-lin 梅祖麟. "An Exercise in Linguistic Criticism: Tu Fu's Autumn Meditations," *HJAS* 28: 44-77.
- Chow Tse-tung 周策縱. *Wen-lin, Studies in the Chinese Humanities*. Madison: University of Wisconsin Press.
- 1970  
 Wayne Schlepp. *Sak-ch'ü, Its Technique and Imagery*. Madison: University of Wisconsin Press.  
 Rev. Paul Fu-mien Yang, *JAS* 30 (1971): 886-7.
- 1971  
 Kao Yu-kung and Mei Tsu-lin. "Syntax, Diction and Imagery in T'ang Poetry," *HJAS* 31: 49-136.
- James R. Hightower. "Allusion in the Poetry of T'ao Ch'ien," *HJAS* 31: 5-27.
- 1973  
 Arthur F. Wright and Denis Twitchett, eds. *Perspectives on the T'ang*. New Haven: Yale University Press.
- 1974  
 Ching-hsien Wang 王靖獻. *The Bell and the Drum: Shih ching as Formulate Poetry in an Oral Tradition*. Berkeley: University of California.

- Cyril Birch, ed. *Studies in Chinese Literary Genres*. Berkeley: University of California Press.
- James J. Y. Liu. *Major Lyricists of the Northern Sung. A.D. 960-1126*. Princeton: Princeton University Press.
- Rev: Robert Joe Cutter, *JAOS* 97.4 (1977): 573-5; David R. Knechtges *JAS* 34 (1974): 508-11.
- 1975
- James J. Y. Liu. "The Study of Chinese Literature in the West: Recent Developments, Current Trends, Future Prospects," *JAS* 35: 21-30.
- Wu-chi Liu and Irving Yucheng Lo, eds. *Sunflower Splendor: Three Thousand Year of Chinese Poetry*. New York: Doubleday, 1975; Bloomington: Indiana University Press, 1976.
- Rev: Donald Holzman, *TP LXIV* (1978): 321-31.
- 1976
- H. C. Chang, ed. and trans. *Chinese Literature, Volume 2: Nature Poets*. New York: Columbia University Press.
- Rev: Marsha Wagner, *JAS* 38 (1978): 771-2.
- Hans H. Frankel. *Flowering Plum and the Palace Lady: Interpretations of Chinese Poet*. New Haven: Yale University Press.
- Rev: Ronald Miao, *JAS* 37 (1978): 736-8; Edward H. Schaf-er, *JAOS* 98 (1978): 172.
- Hugh M. Simson. *T'ang Poetic Vocabulary*. New Haven: Yale University Press.
- Rev: Tsu-Lin Mei, *JAS* 37 (1978): 343-4.
- Hugh M. Simson. *Fifty-five T'ang Poems: A Text in the Reading and Understanding of T'ang Poetry*. New Haven: Yale University Press.
- William H. Nienhauser ed. *Critical Essays on Chinese Literature*. Hon Kong: Chinese University Press.
- Rev: David R. Knechtges, *JAOS* 100 (1980): 92-3.
- 1977
- Stephen Owen. *The Poetry of the Early T'ang*. New Haven: Yale University Press.
- Rev: A. P. Cohen, *OLZ* 76.3 (1981): 293-4; Jan W. Walls, *HJAS* 38 (1978): 502-5; James J. Y. Liu, *JAS* 38 (1978): 168-9.
- 1978
- Lin Shuen-fu 林順夫. *The Transformation of the Chinese Lyrical Tradition: Chiang K'uei and Southern Sung T'zu Poetry*. Princeton: Princeton University Press.
- Rev: James J. Y. Liu, *HJAS* 39 (1979): 211-5; Thomas Thilo, *OLZ* 77.2 (1982): 198-9.
- Kao Yu-kung and Mei Tsu-jin. "Meaning, Metaphor and

- Allusion in T'ang Poetry" *HJAS* 38 (1978): 281-356.
- Ronald C. Miao. *Studies in Chinese Poetry and Poetics, V. 1*. San Francisco: Chinese Materials Center.
- Rev. David R. Knechtges, *JAS* 39 (1979): 584-6.
- 1979
- Stephen Owen. "Transparencies: Reading the T'ang Lyric," *HJAS* 39: 231-52.
- 1980
- Chang, Kang-i Sun. *The Evolution of Chinese T'zu Poetry: From Late T'ang to Northern Sung*. Princeton: Princeton University Press.
- Rev. Donald Holzman, *OLZ* 80 (1985): 82-9; James J. Y. Liu, *HJAS* 41 (1981): 672-5; Yves Hervouet, *JA* 270 (1980): 223; James Hargett, *CLEAR* 5 (1983): 114-7.
- 1981
- Stephen Owen. *The Great Age of Chinese Poetry, The High T'ang*. New Haven: Yale University Press.
- Rev. Donald Holzman, *OLZ* 80. I (1985): 82-9; Yves Hervouet, *TP LXIX* (1983): 122-25.
- 1982
- James J. Y. Liu. *The Intertingual Critic, Interpreting Chinese Poetry*. Bloomington: Indiana University Press.
- Rev. J.-P. Diény, *TP LXIX* (1983): 143-9.
- Charles Hartman. "Alieniloquium: Liu Tsung-yan's Other Voice," *CLEAR* 4: 23-73.
- 1984
- Marsha Wagner. *The Lotus Boat, The Origins of Chinese T'zu Poetry in T'ang Popular Culture*. New York: Columbia University Press.
- Rev. Madeline K. Spring, *JAS* 45 (1986): 390-2; Daniel Bryant, *HJAS* 46 (1986): 619-25.
- Burton Watson. *Columbia Book of Chinese Poetry—from Early Times to the Thirteenth Century*. New York: Columbia University Press.
- Rev. Paul W. Kroll, *JAS* 45 (1985): 131-4; Donald Holzman, *OLZ* 82.4(1987): 410-2; Hans H. Frankel, *HJAS* 46 (1986): 288-95.
- 1985
- William H. Nienhauser, Jr., editor and compiler. *Indiana Companion to Traditional Chinese Literature*. Indiana University Press, 1985.
- Rev. David Knechtges and Taiping Chang, "Notes on a Recent Handbook for Chinese Literature," *JAOS* 107 (1987): 293-304; Glen Dudbridge, "Missionaries at Work," *Times Literary Supplement*, May 9, 1986, p. 511;



- Eugen Feitel, *Monumenta Serica* 37 (1986-87): 399-401.
- Stephen Owen. *Traditional Chinese Poetry and Poetics—Owen of the World*. Madison: University of Wisconsin Press.
- Rev: Pauline R. Yu, *HJAS* 47 (1987): 350-7; James J.Y. Liu, *JAS* 45 (1986): 579-80.
- 1986
- Stephen C. Song, ed. *A Brotherhood in Song—Chinese Poetry and Poetics*. Hong Kong: Chinese University Press.
- Rev: Paul W. Kroll, *JAOS* 108 (1987): 833.
- Lin Shuen-fu and Stephen Owen, eds. *The Vitality of the Lyric Voice, Shih Poetry from the late Han to the Tang*. Princeton: Princeton University Press.
- Rev: James Hargett, *CLEAR* 9 (1987): 141-5; Robert Joe Cutter, *JAS* 46.3 (1987): 634-6; Anne M. Birrell, *JRAS* 1987. 1: 157-9.
- Paul W. Kroll. "Li Po's Transcendent Diction," *JAOS* 106 (1986): 99-118.
- Kang-i Sun Chang. *Six Dynasties Poetry*. Princeton: Princeton University Press.
- Rev: Donald Holzman, *HJAS* 48 (1988): 244-50; Thomas Thilo, *OLZ* 84. I (1989): 88-90; A. G. Blank-estijn, *TP LXXXV* (1989): 187-9.
- Jonathan Chaves, trans. *The Columbia Book of Later Chinese Poetry, Yuan, Ming and Ch'ing Dynasties (1279-1911)*. New York: Columbia University Press.
- Rev: J.D. Schmidt, *JAOS* 110 (1990): 497-9.
- Stephen Owen. *Remembrances—The Experience of the Past in Classical Chinese Literature*. Cambridge: Harvard University Press.
- Rev: Richard John Lynn, *JAS* 46 (1987): 650-1; Anne Birrell, *HJAS* 37 (1987) 394-6.
- Irving Yucheng Lo and William Schultz, eds. *Waiting for the Unicorn Poems and Lyrics of China's Last Dynasty, 1644-1911*. Bloomington: Indiana University Press.
- Rev: Sharon Shih-juan Hou, *JAOS* 110 (1990): 502-3; Owen, *HJAS* 48 (1988): 260-72; Richard E. Strassberg, *JAS* 47 (1988): 337-8; W. L. Idema, *TP LXXIV* (1988): 334-9.
- 1987
- Pauline Yu. *The Reading of Imagery in the Chinese Poetic Tradition*. Princeton: Princeton University Press.
- Rev: Anne M. Birrell, *JRAS* 1989.2: 387-8; W. L. Idema, *TP LXXV* (1989): 289-93; Andrew Lo, *BSCAS* 52 (1989): 593-4; Donald Holzman, *JAS* 47 (1988): 365-7; David McCraw, *CLEAR* 9 (1987): 129-39; Ronald C. Miao, *HJAS* 51 (1991): 726-56.

- 1988  
Anne M. Birrell. *Popular Songs and Ballads of Han China*.  
London: Unwin Hyman.  
Rev: David R. Knechtges, "A New Study of *Han Yieh-fu*," *JAS* 110 (1990): 310-6; Joseph R. Allen, *HJAS* 51 (1991): 309-13; J.-P. Diény, *TP LXXVI* (1990): 132-45.  
Dore Jesse Levy. *Chinese Narrative Poetry: The Late Han through Tang Dynasties*. Durham: Duke University Press.  
Rev: W. L. Idema, *TP LXXVI* (1990): 122-7; Anne M. Birrell, *HJAS* (40) 1990: 428; Joseph R. Allen, *CLEAR* 11 (1990): 139-41.  
C. H. Wang. *From Ritual to Allegory: Seven Essays in Early Chinese Poetry*. Hong Kong: Chinese University Press.  
Rev: Paul W. Kroll, *JAS* 109 (1989): 668-70.  
James J.Y. Liu. *Language-Paradox-Poetics*. Richard John Lynn, ed. Princeton: Princeton University Press, 1988.  
Rev: W. L. Idema, *TP, LXXV* (1989): 277-88; David Palumbo-Liu, *JAS*, 48 (1989): 832-3.  
1989  
John Timothy Wixted, trans. Yoshikawa Kojiro. *Five Hundred*
- Years of Chinese Poetry, 1150-1650: The Chin, Yuan and Ming Dynasties*. Princeton: Princeton University Press.  
Rev: Joseph R. Allen, *JAS* 49 (1990): 390-1.  
Stephen Owen. *Mi-Lou: Poetry and the Labyrinth of Desire*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.  
Rev: Martin Backstrom, *CLEAR* 11 (1989): 146-9; Mark Elvin, *China Review International* (hereafter *CRDI*), 1.1 (Spring 1994: 192-6; Pauline Yu, *JAS* 49 (1989): 129-30.  
Chow Tse-itsung 周策縱. *Wen-lin, Studies in the Chinese Humanities, Volume 2*. Jointly published in Madison and Hong Kong: Department of East Asian Languages and Literature, University of Wisconsin Press, and Institute of Chinese Studies, the Chinese University of Hong Kong.  
Rev: Paul Rouzer, *CLEAR*, 14 (1992): 157-61.  
David McCraw. *Chinese Lyrics of the Seventeenth Century*. Honolulu: University of Hawaii Press.  
Rev: Andrew Lo, *Journal of the Royal Asiatic Society, 3rd series*, 1 (1991): 457-8.  
1991  
Steven van Zoeren. *Poetry and Personality: Reading, Exegesis, and Hermeneutics in Traditional China*. Stanford: Stan-

- ford University Press.  
Rev: Stephen R. Bokenkamp, *JAS*, 52 (1993): 716-7;  
J.-P. Diény, *TP* LXXIX (1993): 172-9; Haun Saussy,  
*HJAS* 52 (1992): 272-80; William H. Nienhauer, Jr.,  
*Journal of Sung-Yuan Studies*, 22 (1990-2): 222-7.  
1992  
Joseph R. Allen. *In the Voice of Others, Chinese Music Bureau  
Poetry*. Ann Arbor: Center for Chinese Studies, Uni-  
versity of Michigan.  
Grace S. Fong, *JAS* 52 (1993): 703-4; J.-P. Diény, *TP*  
LXXIX (1993): 355-62; Christopher L. Conner,  
*CLEAR* 15 (1993): 163-73.  
1993  
Haun Saussy. *The Problem of a Chinese Aesthetic*. Stanford:  
Stanford University Press.  
Rev: Dore Levy, *CLEAR* 17 (1995): 133-7; Joseph  
Allen, *HJAS* 55 (1995): 219-25.  
James I. Crump, Jr. *Song Poems from Yanadu*. Ann Arbor:  
Center for Chinese Studies, The University of Michi-  
gan.  
1994  
Julie Landau, trans. *Beyond Spring, T'zu Poems of the Sung  
Dynasty*. Columbia University Press.  
Victor H. Mair. *Columbia Anthology of Traditional Chinese  
Literature*. New York: Columbia University Press.  
Pauline Yu, ed. *Voices of the Song Lyric in China*. Berkeley:  
University of California Press.  
Rev: Shawn Eichman, *CRI*, 3.2 (Fall 1996): 589-97.  
1995  
Cecile Chu-chin Sun. *Pearl from the Dragon's Mouth, Evocation  
of Feeling and Scene in Chinese Poetry*. Ann Arbor: Cen-  
ter for Chinese Studies, the University of Michigan.  
Yi-Yu Cho Wo and Sandra A. Wawrytko. *Cristal, Spectrums of  
Chinese Culture Through Poetry*. New York: Peter Lang.  
1996  
Stephen Owen. *The End of the Chinese 'Middle Ages,' Essays in  
Mid-T'ang Literary Culture*. Stanford: Stanford Uni-  
versity Press. (三才堂刊 繼)